

## 評価項目「附属学校園のこれまで・これから」

三重県教育委員会経営企画分野教育改革室長

山口 千代己

### 1 附属学校園の教育活動

- (1) 授業参観では、積極的な発言をする児童生徒の生き生きした表情が印象的で、教職員の高い力量が伺えます。そのような中、元気の良い発言と自由な発言とは若干異なるのではないのでしょうか。授業規律をどのように確立するか、子どもたちの集中力をどのように高めるかについても一度検討していただきたいと思います。

生徒指導の面からみれば、校内でも挨拶があまりなされなかったのが、教職員が率先実行して挨拶運動に取り組むとともに、掃除活動についても行動をお願いします。

- (2) 附属小学校から附属中学校へ進学しない生徒がいる。そして、そのことに教職員があまり危機感を持って見えないことが二重の驚きでした。小中学校の交流も始められ、生徒満足度調査も実施されていますが、重要度も測ることができるクロス分析の調査にさせていただくことを望みます。一度に何もかも改善はできません。重要度、満足度をクロス分析し、緊急度の高い事案から順次改善していくことが重要です。また、信頼される学校づくりの一步として、早々に保護者、教職員についても満足度、重要度調査をされてはどうでしょうか。案外、供給側（学校）と受け手側（児童生徒・保護者）とは、「こんなに意識が違うものか」と感じられるはずです。

- (3) 学校評価については、残念ながらほとんどなされていないように見受けられます。「目指す学校像」「現状と課題」「重点目標」「具体的行動計画」へのブレイクダウンが弱いようです。附属中学校の「学力保障への対応」が単に30日以上欠席者で測ることができるのかどうか。例えば、入学者選抜での成績をもとに卒業後の学力達成レベルを数値化し、経年変化をみれば日常の教育活動の改善に生かれます。単年度データは一杯あるのですから、有用に使うことをお勧めします。県内の公立学校では、PDCA サイクルを用いた学校自己評価を発展させた「学校経営の改革方針」と、組織の活性化をみる「学校経営品質アセスメント」で学校経営品質に取り組み始めました。今回の外部評価を機に、数値目標も入った「自己評価」をもとに「外部評価」「第三者評価」に是非取り組んでください。自分の鼻は自分では見られませんから。

- (4) 校区が広いので難しいかも知れませんが、全国の附属学校も参考にしてキャリア教育に取り組まれることを勧めます。これは教育活動全般に言えることですが、全国の附属学校をHPなどで事前調査し、自校の到達できる学校園をマーキング、実地調査し、より良い教育活動に取り組んでください。優れた組織に学ぶ大切さを。

## 2 教育学部との関係

(1) 平成16年度から学部・附属学校連携推進協議会が開催され、附属学校の中期目標・計画、教育実習に伴う諸課題、施設設備などをテーマに、広範囲に協議がなされ、情報共有と意志疎通が図られつつあると感じられます。また、特定課題に対しても教育課程検討委員会、将来構想委員会が開催されるなど、緊密な関係が伺えます。

しかし、いま一度、協議が形式的に流れていないか、代表者だけの単なる情報交換に終わっていないか、受け身、言い放しに終わっていないか、在り方、持ち方を確認し、より良い運営をし、双方が組織全体で意識化をお願いします。

(2) 附属学校園が自ら課題意識を持ち、また近年の教育改革を見据えた主体的な教育実践、教育研究に取り組み、学部への意見具申や有益なデータ提供ができていないか、この辺りにご留意をいただきたい。設置者である大学が国立大学法人へ移行し財源も限られるなかで、学部にとって附属学校園の存在価値は何か、附属学校園にとって学部はどのような存在か、創立当初の理念も含め、双方で改めて議論を深め共通理解を持って欲しいテーマです。同じ学部の附属機関として、附属病院等と機能、役割、成果を比較し、自らの在り方を問い直すことで何かが見えてくると思います。

また、附属小学校では「学びの共同体」を進められていますが、中学校と意志統一のうえ学部教員と協働して、国から与えられた研究開発やテーマでなく、例えば、1学級当たりの最も効果的な定員は何人が、習熟度別学習はどのような状況のとき有益か、学校評価に関して第三者評価の実施、学制に関して6・3制を4・3・2制での研究開発、低学年からの英語教育の効用、理科好きな子どもをつくる等々、全国、県内でも先導的な取組を進め、それを情報発信して欲しいです。それを最も効率的、有効にできるのは高等教育機関と一体の附属学校園だと思えます。

## 3 附属学校園へ寄せる期待

附属学校園は、その存在ゆえでなく、その教育実践や研究により、志のある公立学校教員が勤務したくなるような存在になるミッションを持つべきだと思います。（「誰もそんなこと思っていないよ」、という声が聞こえますが。）まず、附属学校園の教員は附属で教育実習を受けた学生が採用された後、指導教員とともに教科・領域の県内研究会を主宰するなど、県内の教職員集団のリーダーとなり、伝道師であって欲しいです。そのためにも、高い「志」と授業スキルに卓越した熟練の「技」を持ち、将来を見通す透徹した眼を有する、切磋琢磨する教職員集団、組織風土を目指して、日頃の資質向上に取り組みれんことを祈念します。

# 三重大学教育学部外部評価に加わって

津市教育委員会教育長 田 中 彌

今年も外部評価委員を引き受け、委員会に参加したので、些か私見を述べさせていただきます。

## 1. 附属学校を参観して

まず幼稚園を訪れた。幼稚園は、津市の幼・小との人事交流を行っているので、これ迄にも度々訪問したことがある。その度毎に感心するのは、津市の幼稚園にはない、自然豊かで、広い園庭をもつすばらしい環境の中で、保育が行われていることである。この日は中学校3年生の家庭科学習による保育交流が行われていたが、手作りのおもちゃを持って訪れた中学生に対し、臆することなくのびのびと楽しそうに遊ぶ幼児の姿が印象的であった。

最近、幼稚園でも附属各校と交流・連携を深めておられると聞いたが、幼小連携を一層強めてもらいたいと願っている。現在、津市から2人の教諭を派遣しているが、その中の1人は小学校教諭であり、その連携・研究に大きな働きをしてくれるものと思っている。

続いて訪れた養護学校では、小学部の生活単元学習と中学部の美術の授業を参観したが、児童生徒が実に真剣に学習に取り組んでいるのに感心した。教育実践と研究を重ねる中での成果と感じたが、特別支援教育の支援校として、津市の小中学校への巡回相談や教育相談も実施していただいていることに感謝したい。しかし、ある市内の校長の言では、未だ県立養護学校に比べると閉鎖的な感じがするとのことであったので、今後も特別支援教育におけるセンター的な役割を果たしていただきたいと願っている。

次に、中学校を訪れ、1年の国語と社会、3年の美術の授業を参観した。附属中の生徒は、流石に来観者を気にすることなく、真剣に学習に取り組み、積極的に挙手、発言していた。以前、中学校に勤務した教員から「親は子を附属に通わせていることに優越感を持ち、子は地域から浮いているため、親同士、子同士のつながりが少ない。学級でのつながりをつくるのに苦労した。」と聞いたことがある。本年度は「互いの人権を尊重し、協力して集団を高めあえる生徒の育成」に重点をおいて指導に当たっておられるとのことだが、今もそのことは大きな課題となっているのであろうか。

なお、津市教育委員会においては、附属中にも生徒会を中心とした生徒間交流や生徒指導における情報、不審者情報の共有等呼びかけ、これに積極的に加わっていただいていることに感謝したい。

最後に訪れた小学校では、時間の都合で、1年の国語と6年の社会、道徳の授業しか参観できなかった。見せていただいた授業から「質の高い教科指導を通して、子どもたちに豊かな学力をつけていく」ことを目指しておられる様子を垣間見ることができた。子どもたちに如何にじっくり考えさせ、意見をたたかわせ、ひとりひとりに豊かな学力をつけさせていくか、それは附属小のみならずすべての小中学校の永遠のテーマである。

いただいた資料「附属小の現状と課題」の中に、新たな教育課題に因應するために、(1)英語活動の実施、(2)スクールカウンセラーの来校の2つがあげられていたが、これには些か驚いた。それらは、津市内の小学校では数年前から取り組んでいることであり、研究開発校としての役割を附属学校に期待している者にとって、まさに意外な課題であったからである。例えば、算数の少人数指導のモデル校などを期待するが、選抜により入学した児童では、あまりその研究の必要性はないのであろうか。

## 2. 協議の中で

今年の外部評価の対象が附属学校であるためか、協議が盛り上がり、予定された時間があっという間に過ぎた。意見交換に加わる中で感じたことを少しあげてみることにする。

まず、附属学校が「選ばれ続ける学校でありたい」と強く願い、努力されておられることはよくわかった。具体的には“子どもにとっても、教師にとっても魅力ある学校にしたい”ということであろう。しかし、外部評価委員諸氏の意見にはかなり厳しいものがあった。

このところ県下では、学校評価と学校経営品質への取り組みは大いに進み、今や三重県は学校評価の先進県となっているが、附属学校では緒についたばかり、これには少々驚いた。早く取り組みを進め、附属学校独自のシステムの開発を願いたい。

また、研究開発校として期待する声も強かった。例えば、今や全国的に幼小連携、小中一貫教育に取り組む学校が増えてきているが、附属学校がその地理的条件を活かして、幼・小・中一貫教育のモデル校になっていただければ、県下でこれを進める学校の大きな指針となるのではないか。幼児・児童・生徒間の交流、教育課程の検討、人事交流等を積極的に進められんことを願っている。

確かに、附属学校の先生の指導技術は高い水準にある。しかし、附属学校に転入して自分の教師としての腕を磨きたいと積極的に異動を希望する人が少ないのはなぜか、その辺りを学部・附属学校連携推進協議会で議論して欲しいものである。

## 3. 他に感じたこと

今、三重大学が地域に開かれた大学として、着実に前進しておられるのを新聞やテレビ、広報誌などを通じて知っている。

教育学部としても、三重県教育委員会や津市教育委員会、そして四日市市教育委員会と連携して、情報交換を行い、協働事業を展開して、学部研究の充実や学校教育、生涯学習の充実のためにご尽力いただいていることを嬉しく思い、感謝している。さらに連携を強化し、それぞれの発展を願うものである。

また、昨年度から学生の実地研究の推進に力を入れておられるが、今年は津市の幼・小・中学校の研究発表会や公開授業等に、大学の先生方と共に、多くの学生の皆さんが参加されておられるのを見て、嬉しくまた頼もしく感じた。今後も教育実習校のみならず多くの学校に出向き、参観、指導、研修に当たっていただくことを歓迎したい。

## 三重大学教育学部附属学校園の外部評価

四日市市教育委員会教育長 川 北 欣 哉

今回、外部評価委員として始めて附属学校を参観するという貴重な体験をさせていただきました。思いつくまま、私見を述べさせていただきます。

広大な敷地の中に小，中，幼，養護と一連の教育施設が配置され，市や町レベルでは実現出来ない恵まれた環境は素晴らしいものであった。

そこで，まず思ったことはこの恵まれた地の利がどう教育に生かされているかである。

今，本市では幼，小，中一環教育（本市では学びの一体化とっており，学びの連続性の重視の意）の必要性が指摘されており，そのあり方について試行，検討中である。

附属学校では学校間交流の実践報告がなされているが，その効果が資料では読み取れない。同一敷地という条件的に恵まれた附属学校で一貫教育の実践がなされ，その手法や成果が先進事例として公表されれば県下の公立学校のモデルとして大きな参考になるのではないかと，座長の山口委員が委員会の最後の講評の中で述べられたが，個人カルテを利用した学びの継続などは是非その取り組みをし，紹介していただきたいと感じたところである。

小，中学校とも，子どもたちは私語も無く落ち着いて積極的に授業を受けていた。入学時に一部抽選はあると聞くが一般の公立学校とは異なりかなり高いレベルの子どもたちであるから授業に対するクラス全員の取り組み姿勢の違いを感じた。

如何に優秀な子どもの集団であれ，少人数教育の必要性は無いのか疑問である。

本市では一クラス 40 人の限界を悟り，小学 1，2 年生，中学 1 年生の少人数教育，その他の学年では主要科目での少人数授業を実施している。附属学校はすべての学級において 40 人規模で授業をしている。

特に中学生は体も大きく教室内で移動も出来ないほど窮屈で可愛そうな感じも受けた。

基礎学力の定着とともに，教育を快適に受ける環境をつくってやって欲しいと感じたところである。

附属学校園の概要を見るとそれぞれの学校の使命，中期目標・中期計画が掲げられている。そして達成目標，業務目標が定められ校・園の運営がなされている。しかし，本当に目標が達成されているのか，各学校との連携ができているのか，疑問である。どのデータからも読み取れない。先ほど述べた幼，小，中一貫教育のあり方とも共通する。

学校運営の時代から，目標管理のもとでの学校経営へと校長や教員の意識と手法の転換が求められている中，附属学校園が独自の学校づくりを行い，ここ附属ならではの特色を出す必要がある。一般の公立学校と同じ使命，役割では意味がない。授業内容のレベルの高さは当然のこと，教育研究校としてまた教育実習校として県内の教師がこの学校で一度は教鞭を執りたいと憧れる附属学校になるような経営努力を期待する。そうでないと本市も優秀な教員を送りだしている意味がなくなる。経験した教師が管内に戻り一目おかれる存在となる学校，それが附属学校であって欲しい。一層の努力をお願いしたい。

つまりは，確固たる目標を持ち P D C A サイクルを確立し，県内公立校の模範となる特

色を持った学校実現に向け目標達成のために組織一丸となって努力して頂くことが基本であると思う。

学校環境に関しては、数点気になった。

委員会の中でも申し上げたが、児童、生徒の外来者に対する挨拶の無さであった。これは教育の初歩であり是非改善を願いたい。教師の姿を見て子どもは育つ、これは真実だろう。だけど、本市のある学校で子ども達は元気に挨拶するのに教師連中は全く挨拶しないとの苦情を聞いた。どう受け止めていいのか？だけど教師の率先垂範が第一であることに疑いはない。がんばって欲しい。

次に、廊下の塵、埃の多さであった。校舎が古いのは仕方が無い。校舎の新旧と教育内容は関係無いと思っている。清掃担当の用務関係職員がいるのか分からないが、お世辞にも綺麗とは言い難い。現状を見ると、例え帰りの5分でも子どもたちに掃除をさせるべきではないのか、環境教育の一環と考えられないか、ささやかではあるがこの点を提案したい。

思い付くまま述べたが、やはり附属の学校は一般の公立学校とは異なる1つ上位のステータスを持った学校であって欲しい。法人化されたものの歴史と伝統を持つこの学校で教鞭を執り、誇りを持って教育に情熱を燃やしてきた教師が県内に数え切れないほど存在する。今後の新しい教師の育成と、これまで附属に関わり教育に功績を残された諸先生方のためにも三重大学教育学部と附属学校園のご尽力を期待いたします。

# 三重大学教育学部外部評価

三重県高等学校長協会会長 小林 秀 則

評価項目「附属学校園のこれまで・これから」

## 総評

三重大学教育学部附属学校園の施設見学や授業参観経験は初めてのことであり、また、校長および副校長等からの事業展開及び計画など、実践内容について、詳しい説明をいただき、私個人として感じたことについて述べることにより、総評といたしたい。

### 1 教育状況について

現在の教育状況としては、養護学校、幼稚園、小学校、中学校と教える環境や年齢も異なるものの、一つの附属という敷地内に存在していることが、公立の教職員からすると、そのこと自体、すばらしい実践研究が出来うる環境にあると羨ましく感じられた。このことが、一つの大きな魅力であるという認識を教職員すべての共通理解とし、研修や研究に取り組まれば、すばらしい実践結果がでるように思えた。また、附属と公立の人事異動により、県内の研修の輪が拡大するとともに三重県の教育水準の向上に寄与するものと考えられる。したがって、人事異動についても、正常なローテーションを確保しつつ行われることが肝要であると思える。

見学に参加して感じたことは、廊下であった生徒の挨拶、礼については、いささか消極的な面が覗えた。附属学校園を通して、挨拶励行の運動を教員自ら率先して、共通の指導目標にしつつ、連携の確保、重視を率先実行されることが、大切であると考えられる。私学のような、学校園を高い視野に立って、方針を決定していくような理事会的な組織が構築できれば、一層活発な意見が出され、改革を急速に進展するように感じる。

### 2 教育水準について

授業参観の印象ではあるが、生徒は、全員前向きの姿勢で授業に臨んでおり、担当者の設問に的確に、競い合い発表する姿勢は、すばらしいものがある。こうした授業風景から一定の学力を維持し、発展させているように感じ取れた。ただ、設問内容によっては、自分で相当の時間吟味する必要のあるものと、直感で答えられるものを織り交ぜながら、授業展開する必要があるように感じられた。授業でのメリハリや集中力の大切さをどのようにしていけばよいか教材を含めて研究の必要性を感じた。また、養護学校などで利用されている個人カルテを学習面でも利用しながら、成長に応じた継続的指導の在り方を模索しつつ、個を大切に学習指導が今以上に展開されることを期待したい。

### 3 学校経営の視点から

学校経営の視点から、校長のリーダーシップが問われる事が多いが、まず、管理職として目指す学校像はどうあるべきかについて、保護者にもわかる学校園を含めた方針をまず

立てる必要がある。そのためには、校種間の異なる教職員が、評価しあうオフサイトミーティングを実施し、議論し共通の目標や理念を管理職ともども構築していく中で、それじゃ、今年度の行動目標は、具体的にこんなことを実施しようとする具体的な目標値を立て、そのための予算はどうあるべきかということ議論し、実行していくことが重要である。でないと、現在のように、立てている目標に具体性がなく、いつまでも目標は目標だということで、真剣みが生じてこない計画になってしまうように感じる。

具体的な計画として、幼、小、中を通した一貫した具体的行動計画、そして独自の計画が縦系と横系になってマトリックス的效果を生み出すよう、ご議論いただきたい。

また、教職員が働きやすい、生き甲斐のある学校にするため、年齢構成等バランスのとれた集団になるよう学校経営の視点から管理職が考える必要がある。研究、研修の蓄積、伝授のできる組織であるべきと考える。

施設設備については、耐震対策等でいささか老朽化している施設の改修がなされたように見受けられるが、安全安心の視点に立った改修等が計画的に進行される必要があると感じられた。養護学校のグラウンドなどは、そうした視点からは、優先すべきものと考えられる。また、小さなことではあるが、生徒持参の水筒が廊下に並べられていたが、不審者が進入したときの対応が、これでいいのかと心配がよぎった。

大学との連携という視点では、極めて有利な立場にあり、一層の連携の強化をお願いしたい。

#### 4 学校評価について

学校評価については、評価者をどうするのか、授業評価については、子供たちにどのような項目で評価させるのか、評価者選定や方法については議論していただくなくてはならないと思うが、目標設定が具体的であれば、評価視点もはっきりしてこようかと考える。いままでの目標設定を具体的なものにするよう努力いただくことを期待したい。

## 第7回三重大学教育学部外部評価について

三重県小中学校長会会長 古 儀 憲次郎

H18年11月21日の午前中、外部評価学外委員として、附属小学校、附属中学校、附属養護学校それぞれの授業を参観、午後からは三重大学教育学部において各附属学校園の現状と課題の説明を受けた。こうしたことと、事前に送付された資料をもとに外部評価を行った。一回の参観や説明であることもあり、的確な評価は難しく妥当性に欠くのではないかと心配である。評価に当たっては、公立学校（小学校）にいる立場から評価を行った。

### 1. 附属学校園の使命・役割について

附属学校園の使命のなかに「地域教育の改善進歩に寄与する。」とある。その中期目標に「学部との緊密な連携のもとに、新たな教育を探求する実験校、及び新たな質が求められる教育職員養成の実地研究の場としての機能を一層強化する。」「地域の教育の発展に寄与するとともに、地域に開かれかつ効果的・適切な学校運営を促進する。」とある。

今、公立学校はさまざまな課題を抱えている。いじめや不登校、学習意欲の低下、仲間とのつながりの希薄化、コミュニケーション能力の低下・・・そして、次々に出されてくる教育改革・・・学校は今そのなかで喘いでいる。

こうした状況はもちろん、附属学校園にも同様に存在すると思うが、今、公立校はこれら今日的課題にどう取り組んでいくか試行錯誤している。附属学校園はこうした今日的課題の解決に向け、先進校として一つの方向性を示してほしいというのが公立校からの願いである。附属幼稚園の研究テーマ「今、必要とされる幼稚園とは？～入園前の子どもも含めた子どもと親の実態の捉え直し～」のような取組が広がることを願う。

こうした課題への取組は、教育学部との連携のもとに進められることが附属学校園の最大の強みであると思う。その強みを発揮できるしくみを是非構築していただきたい。そのためにも、学部・附属学校連携推進協議会や附属学校将来構想特別委員会の発展をお願いしたい。

### 2. 入学者選抜制度に関わって

附属幼稚園の課題のなかに、「近年、軽度の発達障害とみられる幼児の入園が増えつつある。軽度発達障害児の増加は教育界一般の状況と考えられ、大学の教育学部の附属幼稚園であるからこそ、子ども理解、教育方法の充実、保護者との連携を推進するべき方向を探っていかなければならない。」とある。

一方附属中学校には、「本校が目指す生徒像に近づく可能性を持つ入学者選抜制度を考える・・・本校が目指す生徒像により合致した生徒を選抜するねらいがある・・・」とある。入学者選抜への考え方に相違があるように受け取れるがどうであろうか。

教育実習校、教育研究校としての附属学校園の役割からすると、ある程度の目指す生徒像により合致した生徒を選抜する必要性はあろうが、県下の先進校とする役割からすれば、できる限り公立校の子どもの現状に近い姿がいいのではないかと思える。

### 3．教育実習（教員養成）に関わって

「公立学校が抱える教育課題や教科指導力向上に関わる，より実践的な授業内容や授業方法を講義内容として取り上げていただきたい。私達は三重の将来を担う子どもを育てるという重要な役割を常に意識していきたい。」という文章が、『「教育実習指導のあり方」に関する総合的研究（ ）』に記載されている。

附属学校園と教育学部がより有機的につながり，連携を深め，三重県教育の明日を担う教員養成と三重県教育の先導的な存在であられることをお願いしたい。

### 4．附属学校園参観を通して

授業を参観し，さすがに附属学校園だと思った。聴き合い，つながり合う授業がなされていた。多人数での一斉授業であったが，一人ひとりがよく集中して授業に参加していた。下駄箱の靴が見事に揃っていた。

ただ，廊下ですれ違っても挨拶が少なかった。附属養護学校の老朽化が気になった。

# 三重大学教育学部外部評価結果まとめ

三重県国公立幼稚園長会書記 小林 芳子

評価項目「附属学校園のこれまで・これから」

幼稚園を中心に（感想を）述べさせていただきます。

附属幼稚園の教育目標が、「感じる力」「考える力」「生きる力」に通じる豊かな人間性と自己実現の土台を築いていけるよう幼稚園教育の内容の充実とあります。

## 身近な自然体験の組織化

四季折々の自然体験・遊びを通して子どもたち自らが発見し、体験でき、そしてすぐ遊びに取り入れられる環境である。その中で、自然体験が遊びの広がりや感じる心、友達とのつながりになっていく。

例えば、光るぴかぴかだんご作り、虫捕り、秋の実や落ち葉にも触れられ、めだかのいる池も自然の雨水を利用した池であり、園庭の入り口にそびえる鈴掛けの木（プラタナスの木）では木登りができ、すばらしい保育環境の構成である。このような環境は、子どもたちの発達に必要な経験をする大切な要素であるので、今後も保って行って欲しい。

園内の各年齢に応じ、工夫されたコーナー遊びや温かみの環境構成、園児の発達と年齢に応じたきめ細かい配慮や保護者との連携を密にされた温かさの感じられる保育と伝統が感じられた。

また、子どもを取り巻く環境の変化や少子化、核家族における人間関係の希薄化、保護者の期待等を考えられた研究をされ、今日、必要とされる幼稚園をめざして取り組まれており、自分自身、改めて幼稚園教育の意義を見つめ直しました。

## 地域連携について

未就園保育としては、園庭開放を年数回も行われ、現代は少子化の時代で周りに友だちが少ないことや、近所の交流がなく、近くの子ども同士が遊ぶ機会や遊ぶ場所も少なくなり、そして外で遊ばない子どもが多くなってきている現状である。この様なことから、園を開放し、子どもたちが遊びに来ることにより親同士の交流も図れる子育て支援の提供の場とされていることは、今、本当に必要とされているのではないのでしょうか。

地域の特色を生かした保育としては一般の地域性をもった園に比べ、限られた大学関係者が中心となっていってしまうように思いました。

しかし、先日の公開保育研究会やシンポジウムでは、いろいろな方からさまざまな角度の意見をもらって進めておられる様子もうかがい知れることができ、今問われている子育て支援、保護者支援、連携などにつながられている方向性を感じました。

また、私どもの園でも預かり保育を実施しておりますが、幼保一元化や認定子ども園制度化と少子化における子どもと保護者の実態における保育の見直し等を行うことも大切になってきています。

### 幼小中連携について

幼稚園から小学校への学びの連続性が重視されています。幼稚園での遊びのひとつひとつの体験や経験が、結果的には小学校の教科の力としてつながっていきます。その様なことを考えた教育目標があり、幼稚園、小学校、中学校が同じ目標である「感じる力」「考える力」「生きる力」に通じる豊かな人間性と自己実現の土台を築いていける力の育成に向かって、それぞれの発達に応じた細やかな教育がなされていかれることを願っています。

また、就学前教育において、小学校へとつなげていく年長児の生活の見直しを含め、小学校へつなげる保育を視野に入れながら幼稚園教育の改善をされており、私自身もたくさん学ばせていただきました。

参観させていただいた日には、中学校のお兄さん、お姉さんと一緒に遊んでいるところでした。一緒に触れ合い遊ぶ体験は、少子化の今にとって大切だと思います。私どもの園でも中学校のお兄さんやお姉さんが職場体験として3日間来られ、その日は今までに経験したことがない遊びを考えたり、中学校の部活動の一場面を紹介してもらったり、大きくなったら「あんなお兄さん、お姉さんになりたいな」と、夢やあこがれを持ってくれたらと考えております。そして、それぞれに学ぶものがあって欲しいと思います。

このような、幼、小、中の交流においても、教育目標に向かって附属学校園が一緒に取り組まれ、研究を積まれてみえますので、今後とも私たちにとっても魅力ある幼稚園、小学校、中学校であっていただきたいと思ひます。

附属学校園の教職員や大学関係者が一緒に研究され、子どもたちの発達状況をしっかりと踏まえられ、園内研修、公開保育研修などを通じて自己評価をされ、教員間の研修をもって進められており、方向性を持って、改善がなされた取り組みまれておられます。今後も研究会をしていただいて、私どもも学ばせていただきたいと思ひました。そして、魅力ある開かれた園、学校づくりとして、より一層取り組んでいただきたいと思ひました。

### 管理・施設について

幼児が自然の中で、そして安全に生き生きと遊べる環境であり、施設としては古くなってきましたが、伝統を大切に生かされた保育環境であるので、是非大事に保っていただけると願っております。

## 「附属学校園のこれまで・これから」の評価結果

三重大学教育学部同窓会副会長 沓 張 久 治

- 幼・小・中の一貫教育と養護学校との連携の実現をめざす魅力ある学校園づくり -

平成 18 年 11 月 21 日の外部評価委員会で話し合われた後、外部評価委員との協議で評価のまとめとして、座長が次の 5 つの観点から附属学校園について講評されました。

『学校園の教育状況』、『子どもたちの学力・体力水準』、『学校経営、魅力ある学校園、人事交流、施設・設備、大学学部との連携』、『学校評価』、『地域住民、保護者との連携』

評価の具体的な内容は、外部評価委員会の記録で座長講評をご覧いただき、ここでは上記の 3 つ目の観点の中の「魅力ある学校園」を取り上げます。

ここでの寸評として、『魅力ある学校園づくりであって欲しい。教職員に魅力ある学校園づくりとなっていたために、開かれた学校園づくりに取り組む。』の記述内容について、少し踏み込んでみることにします。

「魅力ある学校園」とは、附属学校園に勤務している教員の皆様方は、どのような学校園を描いているのでしょうか。

「恵まれた家庭に育った子どもたちを、特別に選んで集め、教育施設・設備の条件整備がされた学校園で、子どもたちが生き生きと学習に取り組み、その子どもたちと係わる教員には、学習・生徒指導上の苦労も少なく、子どもや保護者に信頼され、教科指導に専念できる。そして公立学校園の教員と変わらない処遇条件であり、全ての教職員が共に高まろうとする仲間である。そこに勤務する教員の人間関係に苦労することもなく、自分たちが目指す教育活動に取組める。更に附属学校園を転出するとき、しかるべきポストに人事異動が可能となる。こんな学校園が、魅力ある附属学校園である。」

今の時代からすれば、このような附属学校園は、現実離れした絵に描いた餅であり、教育環境の諸条件が全て整えられるとは、どなたも考えていないでしょう。

どの学校園でも子どもや保護者等への対応に追われて、教科指導を始めとする知育・体育・徳育・保育に専念できずに、「魅力ある学校園づくり」を目指しにくい状況にあります。

魅力ある学校園づくりを目指すためには、現状の附属学校園ありきから始めることです。

三重大学教育学部の附属学校園のハード面とソフト面の「強みと弱み」を整理することから始めます。ハード面の強みは、「フェンス一つ隔てた同一キャンパス内にあること」です。しかし弱みは、「各学校園の施設が共に老朽化してきていること」です。またソフト面の強みは、「実験実証学校園として、学校経営・改革への取り組みに制約が少ないこと」ですが、弱みとしては「学校園間及び大学学部との連携が不十分であること」です。

このような強みや弱みを附属学校園と大学学部が連携して整理します。その過程で得るデータやこれまで蓄積されたデータを基に、学校園評価を内部教員から始めるべきです。その評価の実施から、現状の問題や課題が明確になります。そのためには、4 つの附属学校園の教員が、共有する目標を持つことです。その目標を教員ひとり一人が認識しながら、粘り強くその目標に向かう課題や問題に対する取り組みを始めることです。その共有目標

は、ハード面の強みと弱みをカバーし、ソフト面へ波及させる「幼・小・中の一貫教育と養護学校の連携」に取り組む大きなビジョンを持つことです。このビジョンを内外に発信し、附属学校園の目指す方向が一つになれば、「魅力ある学校園づくり」が、開始されます。単独校園で魅力づくりに努力されても、成果は期待できません。

その取り組みの過程で、幼児、児童、生徒を育てる指導力が向上します。それと相まって使命感を醸成できる環境にある学校園で、真摯に参画する教員の交流が可能となります。質の高い教師集団に係わる一員として教員ひとり一人は、魅力ある附属学校園をつくることに繋がる満足感を持ち、同時に外部から「魅力ある学校園」と評価されることでしょう。